〝コロナ世代〟の友だちづくり

大学という多くの可能性に溢れる空間での対人関係の構築は、さまざまな背景を持つ人々との交流を求められる社会人への準備期間として、また、社会で必要とされるソーシャルスキルを磨き、自身のアイデンティティを確立する機会として、重要な意味を持っている。

感染症の流行がはじまった２０２０年春、学生生活は大きく変化した。人と人との接触を回避すべく、キャンパスへの入構は制限され、学生たちは憧れのキャンパスライフとは程遠い孤独な生活を突きつけられたのだ。

いまだ感染症収束の見通しが立っていない中、各大学は感染状況を考慮しながら対面授業を再開するなど、アフターコロナに向けて大学の活気を取り戻そうと努めてい

CONTENTS

居場所づくりが必要になった大学
石田 光規
早稲田大学文学学術院教授

コロナ禍における学生への対応
幸田 拓也
福岡大学学生部事務部学生課

Friendship of coro

る。その一方で、学生生活にうまく馴染むことができないまま今に至る学生や、生活が「対面」に切り替わっていくことに戸惑いを覚える学生も少なくないのではないだろうか。「失われたキャンパスライフ」が残した課題は根深く、大学は手探りで活路を見出そうとしている。

対人関係を構築した経験や、そこから得られた学びは、学生の成長や進路選択に大きな影響を及ぼすと考えられている。今まさに大きな変化の渦中にいる学生に向けて、大学は何をすべきなのか。本特集では、各大学の取り組み事例の紹介を通じて、感染症が学生たちのキャンパスライフに与えた影響等を振り返り、コロナ禍を生きる学生たちにとっての「友だちづくり」の意義について考える機会としたい。

キャンパスライフの旅を歩む「My Journey」の取り組み
東洋大学
学生PRワーキングチーム

新たな交流企画で学生の孤立を防ぐ
―DWCLA Pray & Hikeの取り組みを中心に―
村上 恵
同志社女子大学学生支援部長・生活科学部食物栄養科学科教授

入学前の友だちづくりサポート
―TOGAKU Meet & Greet（トーガクミーグリ）―
渡邊 紳也
東洋学園大学入試広報センター入試室課長補佐・ましましプロジェクトリーダー

共通教育での学修を通した友だちづくり
高野 嘉寿彦
信州大学学術研究院総合人間科学系長・全学教育機構長

居場所づくりが必要になった大学

石田 光規
早稲田大学文学学術院教授

1 友だちに否定的なことは言えない

「友だちとケンカをしてしまうと修復の機会がなさそうで怖い」

これは、私のゼミの学生が読書会の際に発した言葉である。読書会に参加しているすべての学生が賛同していたので、決して珍しい考えではないのだろう。昨今の大学生は、これほどまでにはかない友人関係の中で大学生活を送っている。

私たちが友だちづきあいの中に、頑健さではなくはかなさを見いだすようになったのは、2000年代あたりからのことだ。物的に豊かになり、個々人の意見を尊重する機運が増すと、私たちはいろいろな物事を選択できるようになった。

友だちづきあいもその限りではなく、中学校・高校のようにクラスのない大学では、特に選択の余地が増していった。今や、どのような人とどのように付き合うかは、それぞれの選択に委ねられている。

付き合う相手を選べるようになれば、私たちは、お望みの相手と好きなように付き合うことができる、と思うだろう。しかし、冒頭の大学生の発言を見ると、現実にはそうなっていないように感じる。むしろ、友だちづきあいに、必要以上に気を遣っている姿が浮かび上がる。

なぜ、このようになってしまったのか。答えは簡単だ。付き合う相手を選ぶ権利は、私のみならず周りの人も持っているからである。

私が付き合う相手を選ぶことができるように、あなたも付き合う相手を選ぶことができる。このような社会で付き合う相手、すなわち、友だちを確保するには、相手から友だちとして選んでもらわなければならない。

友だちとして選ばれるためには、相手に魅力的だと思ってもらうことが肝要だ。かくして大学生は、さほど興味がなくとも流行の歌をチェックし、みんなにウケるネタを仕入れるようになる。ケンカなどはもってのほかだ。ケンカを含め、つながりの中に否定的な材料を注ぎ込む行為は、友

corona generation

だち関係の存続を脅かすのである。

大学生は、友だち関係を維持するために、互いに対立を避け、気を遣いあいながらキャンパスライフを送っている。その一方で、過剰な気遣いにより成り立つ関係は、「友だちといると疲れる」状態を引き起こし、本音の行き場所や居場所の問題を引き起こす。ゼミ、サークル、アルバイトなど多数の集団に所属していても、「本音を出せる場所がない」と語る大学生は少なくない。

2 人間関係の棚卸しと接触の選別

このような中、世界はコロナ騒動に巻き込まれた。「人と会うこと」を不要不急の範疇に取り込んだコロナ禍は、付き合う相手の選別傾向、すなわち、「接触の選別」を加速させた。その仕組みはこうだ。

コロナ禍に突入し、「新しい生活様式」や「不要不急」が声高に叫ばれる中、私たちは「人間関係の棚卸し」をいっせいに始めた。なかなか人と会えない中で、それでも会うべき人はどのような人なのか、国民全員が一斉に考え出したのである。

その結果、直接会うに足る魅力に欠ける人は、つながりから排除されていった。まさに「接触の選別」とでも言うべき現象が、この三年弱の間に引き起こされたのである。

「人間関係の棚卸し」や「接触の選別」の影響は、大学生に対して特に深刻であった。多くの大学生は、入学後にはゼロベースで自らの友だち関係を再編する、という課題を背負う。しかしながら、多くの人が付き合うべき相手を見直し、接触を限定してゆく中で、新しいつながりをつくるのは容易ではない。

初対面の人と友だち関係を築くには、共に行動し、会話をする必要がある。しかし、コロナ騒動の渦中には、おいそれと人を誘えない。声をかけた相手から「常識のない人」と思われる可能性があるからだ。

先にも述べたように、誰かと友だちになるにあたり最も避けるべきは、否定的評価である。会話や外食に対して、相手がどのようなイメージを抱いているかわからない中で誰かを誘うのは、勇気のいることだ。

コロナ前に友だちづくりの機会を提供してきた懇親会も、公には禁止され、会食は、若干の後ろめたさを伴う「ヤミ行為」になった。「人間関係の棚卸し」や「接触の選別」

Friendship of

が進む中、あえてこの時期に対面で会おうとする相手は、高校の頃に仲のよかった人など、すでに気心の知れた相手に限られてくる。3年経ってもマスクを外した顔を見たことがない、という関係は決して珍しくはない。

コロナ騒動も3年目に入ると、キャンパスを闊歩する学生の大半は、コロナ対応下にある大学しか知らない。当然ながら、孤独感や心理的な不安を抱える学生は増え、早稲田大学でも学生相談の件数は増している。とくに地方出身者は、新しいつながりもできず、かといって、これまで仲良かった友だちにも会えず、という状況から体調不良に陥る人が多い。

行動の選択肢が増す大学生活は、自ら動かなければ友だち関係からも置いていかれがちだ。コロナ禍により自由な行動は制約され、なおかつ、選別の傾向は増している。そこにコロナ禍がもたらしたもう一つの産物、オンライン化が加わり、友だちづくりは一層難しくなった。

3 選別を加速させるオンライン

周知のように、大学のみならず日本社会では、コロナ禍を経てオンラインでの交流が急速に増えていった。

そもそも、日本国民の多くがスマートフォンを手にした時点で、オンラインで交流する環境は技術的には整っていた。とはいえ、私たちはオンラインよりも対面の交流を「いいもの」と考えていた。

コロナ禍はオンライン行動に関する時計の針を一挙に進め、オンラインの交流を文化としても許容しうる土壌を生み出した。オンラインの交流が文化として受け入れられたことで、私たちは人と何かをするにあたり、オンラインで済ますか対面にするかを考えるようになった。

このような社会で人と顔を合わせて交流するには、直接会うに足る理由をそれぞれが用意しなければならない。オンラインで事足りると判断された物事は、電子的なコミュニケーションに置き換えられてゆき、「接触の選別」はますます進んでゆく。

大学の授業のオンライン化が進んでゆけば、選別はさらに加速するだろう。授業を媒介に学生が何気なく集まっていた時代は過去のものとなり、目的や気分を共有する者だけが会うようになる。何気なく大学に行き、授業に出て友だちをつくるという行為は、オンライン化の動向に

よっては難しくなるかもしれない。

4 集まる場所を確保する

今や大学が「何気なく」集まれる場所を「意図的に」つくらなければならない時代になりつつある。「何気ない」ものを「意図的に」つくるというのは、言葉として矛盾しているが、そのような時代にさしかかっているのだ。放っておいても誰もがキャンパスに集まっていた時代とは違う。

人と会わなくてもよい環境が整備されれば、私たちは誰かに会うときも「会うに足る目的」を欲するようになる。一見合理的に思える目的をベースとした交流は、目的から外れた人を排除し、場に息苦しさを生み出すこともある。

誰かと会う目的を一生懸命に準備し、その目的を満たすよう努力して友だちの輪に入り込む。そのような付き合いは、時に重苦しいものにもなろう。だからこそ、目的や役割といったものから離れ、ただ集まれる・立ち寄れる場所をつくる必要がある。

とはいえ、目的や役割を問わない場所をつくるのはことのほか難しい。目的や役割を問わない場は、その性質ゆえ、そこに立ち寄る理由までも奪ってしまう。日々忙しく、目的ベースで物事を考えがちな大学生が、立ち寄る理由のない場にわざわざ足を向けるとは考えがたい。したがって、目的や役割を問わない場所とはいえ、学生が足を向ける工夫は必要だ。手っ取り早いのは学生に必要な活動と居場所の機能を連結させることである。

取るべき方策は大学の置かれた状況により異なるだろう。学業が学生を結びつける触媒になる大学もあれば、カフェが機能する大学もある。その点を見極めるためには、まず、学生の状況を精査することだ。大学がキャンパスの中に学生の居場所をどのようにつくっていくか。そのようなことを考える時代になりつつある。

コロナ禍における学生への対応

幸田 拓也
福岡大学学生部事務部学生課

はじめに

福岡大学は「建学の精神」に基づく「全人教育」を目標とし、9学部31学科、大学院10研究科34専攻を擁する総合大学として88年の歴史を紡いできた。また、文理融合が衆目を集める今般の大学業界において、全学部が一つのキャンパスに集うという利点を最大限に活用し、真理と自由の追求を通して自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会発展に寄与する人材の輩出を最大の使命として、日々、教育・研究・医療の質的向上に取り組んでいる。その中で、正課外の活動である学友会活動も大学教育の一環として捉え注力しており、目標の体現においても大変重要な役割を果たしている。

本学学友会は総務委員会を中心に学術文化部会、体育部会、愛好会、その他公認団体等から延べ２００を超える団体で構成され、予算折衝や大学執行部との交渉、自治行事の開催・運営等、各分野において学内外で幅広い活動を展開している。中でも「新入生歓迎オリエンテーション」は年度の始まりとともに実施される一大行事で、特に新入生に向けた包括的サポートの場および全学友会間の親睦融和の機会として位置づけられている。

以下、コロナ禍における生活様式の変化や感染状況に応じて変移する活動制限に柔軟に対応しながらも、精力的に活動を展開するオリエンテーション実行委員会の取り組みを紹介したい。

1　学生の心的変化と新入生歓迎オリエンテーションの意義

全国的に猛威を振るう新型コロナウイルス感染症は本学にも多大なる爪痕を残した。特に、入学直後から登学が一切できなかった現3年次生以降はオンライン化の影響

Friendship of coro

を受け、同じ志を持つ学友との対面での交流機会を喪失したことで、心的距離の乖離が拡大し、その影響から今なお、対人関係の構築を非常に難儀なものと感じている学生が多いように見受けられる。そのような状況を改善するべく立ち上がったのが前述の総務委員会を中心に結成されたオリエンテーション実行委員会である。例年、組織されている委員会ではあるものの、コロナ禍を通じて変化していく学生たちの様相を一番近くで見てきたため、その敏感な変化を肌で感じている分、従来の慣習にとらわれず、企画の本質を見直すことの重要性を意識し、「今の新入生が何を求めているのか」を徹底的に追究することで、コロナ禍での実施に向けての一歩を踏み出した。特に注目すべきは新入生歓迎ピクニックの実施と学友会独自のWebサイトの運用開始である。

まず、新入生歓迎ピクニックは初めて親元を離れて新生活を始める新入生の不安を早い段階で少しでも解消すること、そして4・6年間を通じ支えあうことができるかけがえのない学友との最初の出会いの場を提供することを主たる目的に毎年4月中旬の日曜日に実施している。例年の参加者は約1000人で、2018年より長崎県佐世保市のハウステンボスで開催している恒例行事であるが、コロナ禍以降初の開催となった令和4年度は、参加者を50%にまで制限し、換気や検温等の徹底した感染症対策を万全に講じることで安全・安心な運営を行った。学内では体験できない多くの活動は、不安を抱えている新入生にとって大変意義のある時間となった。参加者からは学部学科を越えた交友関係を構築できたとの感想が寄せられ、日々の生活を鮮やかに彩ることができた点において、一定の成果を上げている。また、令和4年度は感染対策の観点から、別日程で学内開催となったが、例年はこのピクニック中に部活動や愛好会の団体と協力し、歓迎ステージの時間を設けることで、団体は日頃の鍛錬の成果を発揮し、新入部員の獲得を行う。一方で、新入生は活動の様子を間近で見ることができ、学生時代の全てを捧げて取り組む活動と巡り合うことができる等、企画への参加が双方にいい影響を与えている点も非常に評価できる。

次に、学友会独自のWebサイト運用の評価するべき点は、「コロナ禍で変化している学生の本質を見極めた」ことと、「学生自治で創り上げた」ものである点だ。学生たちとのやりとりを重ねる中で、確かに多くの学生は対面での

交流機会を喪失したものの、講義や情報発信等のすべてをオンライン化したことで、従来の学生と比較すると機器操作に抵抗を感じにくい傾向にあると感じた。当時の実行委員会はこの点に着目し、どの学生も必要な情報を手軽に入手でき、なおかつ分からなければ気軽に問い合わせることができる窓口をサイト内に設けることで、学生たちへのサポートひいては学友会間の交流機会の創出を図った。また、大学はインターネットでさまざまな情報の発信を行っているが、ログイン方法の煩雑さや使用される言葉が学生にとっては難解に感じられる等の理由から、見ない学生が多数いることが現状としてあった。一方、学生が学生のために作成し、学生自治の範疇で運用する当サイトは前述の問題を幾分か解消し、今に続く交流の礎を築くことができた点を評価することができる。

2　大学側の評価と今後の展望

ここまで、オリエンテーション実行委員会の活動事例を紹介してきたが、大学としては新入生歓迎オリエンテーション企画を「学生自治」の観点から高く評価している。入学までの大学の魅力アピールや入学後の資格取得支援・経済的支援・就職支援等については既存の制度が整っているが、ステークホルダーである学生たちの敏感な変化や交友関係についての悩み・不安は、教職員が関与できない私生活において、特に現れる部分であり、同じ目線に立つことができても、価値観や考え方の違いから同じ立場で対応することが難しい等の理由から、大学の直接的なサポートが現実的ではないという課題がある。

しかし、本学では学生有志が自主的・主体的にこの課題解決に向けて取り組む風土が代々受け継がれており、特にコロナ禍を経て、本質を見極めることの重要性と慣習からの脱却を念頭に置いた学生の学生による学生のための活動が拡大していることから、今後、コロナ世代の学生たちの新しい交友関係の構築へ、無限の可能性を感じている。また、新入生歓迎オリエンテーションにおける多様な企画は、新入生の不安解消につながり、大学生活を教職員と学生の双方で全学的にサポートできる、言わば「教職学協働」が形成されているということができる。今後も、学生自治を尊重しつつ、慣習に縛られない自由な発想に基づいた学生の自治活動を通じて、多くの学生が学部横

corona generation

断的な関係性を構築し、新しい環境の中で有意義な学生生活を送ることができるようになることを期待している。

おわりに

今般、「みんなで一緒に何かに取り組む」よりも、留学やインターンを通して個を磨く「個人至上主義」が主流となりつつある複雑で多感な学生を抱える時代に突入したともいえる状況にある。しかし、本学の新入生歓迎オリエンテーションは長きにわたり受け継がれる歴史と伝統を次の世代に受け継ぎつつも、慣習にとらわれることなく、本質を見極めることでコロナ禍における新たな友だちづくりや交流の在り方を見出すことができる企画として無限の可能性があると考える。学生自治の定義は難しく、教職員のサポートの在り方に最適解を導き出すことは社会情勢や世代間の考え方の違いからも不可能に近いが、何はともあれ先入観にとらわれず、学生らしい機転に溢れた思考のもと学生が学生のために手を差し伸べること、学生による学生のための活動が展開されていくことは、本学が掲げる「人らしき人」を育成するという全人教育の体現であるに他ならない。今後も学生を取り巻く環境はめまぐるしく移り変わり、それに伴う対応を多くの場面で迫られ、心的な変化もさらに多様化していく中で、学生自治のさらなる充実と交流のきっかけとなる新入生歓迎オリエンテーション企画の展開に期待していきたい。

キャンパスライフの旅を歩む「My Journey」の取り組み

東洋大学
学生PRワーキングチーム※

1　東洋大学教育DX推進基本計画

東洋大学では、2021年1月に「学生ひとり一人の成長を約束するため、デジタルを十分に活用した学修者本位の教育の実現を目指し、大学全体の教育の高度化と質保証を十全にする」という方針のもと、「東洋大学教育DX推進基本計画」を策定した。具体的には、「入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用」「オンキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化」「建学の精神の具現化を目的としたリカレント教育の世界展開(国内地域含む)」といった計画のもとに、学修者本位の教育の実現を目指す多様な取り組みを展開している。

同計画の取り組みの一つとして、スマートフォンアプリの開発と教育・学生支援の向上に繋がるデータの利活用に着手している。具体的には、キャンパスライフに欠かせない重要情報を学生が適時適確に把握できるようにしたり、学生自身の成長の振り返りや自己省察の機会を柔軟に行えたりするなど、情報取得の利便性や学習意欲の向上に資するよう取り組んでいる。DX(Digital Transformation)は、既存事業の効率化と新しい価値の創出に大きく分かれるといわれる。今回の主題は、コロナ禍の友人づくりであり、DXの詳細を述べる場ではないが、本学の教育DXの取り組みは、学生を中心に据えた柔軟な学びの機会をもたらすという新しい価値創出に比重を置いていると捉えている。

前述のスマートフォンアプリには、学生自身が履修する授業時間割等を確認する機能もあり、よく使われているが、大きな目的は、学生たちが肌身離さず持ち歩いているスマートフォンを活用し、大学と学生との接点をつくり出すことである。学生が何に困っているのか、何を求めているのか、3万人の学生たちの声を把握し、その声をもとに教

職員らが連携し、教育やキャンパス環境において必要な改善を図っていくことにある。

従来、学生の声や学習・生活状況を把握するには、学期ごとの成績状況に加え、定点観測的に年に一度、または数回、在学生向けのアンケートを実施したり、卒業時にアンケートを行うなどして、学生の傾向を包括的に把握し、必要に応じて対策を考えるといった対応が行われてきた。しかし、学生本位の学習環境の整備や学生支援を行っていくためには、十分な把握ができているとはいいがたい。とりわけ、コロナ禍においては、学生は感染リスクだけではなく、社会環境が激しく変化する状況のなかで、さまざまなリスクと向き合って生きている。

大学は、学生の状況を適時把握し、教職員がその場その場で必要な判断を繰り返しながら、最適な支援ができるように、常時観測型に切り替えていく必要があると考えている。

一方、自己省察は、本学の建学の精神である「諸学の基礎は哲学にあり」という、根本的な理念にも通じるものであり、物事の本質に迫り、自己を見つめ、磨いていく、人間的な成長過程の営みは、東洋大学の教育において伝統的な考え方である。学生は多種多様な経験を重ねながら成長していく。その過程で自己を見つめるタイミングは、大学側が決めるものでもなく、また画一的な仕様のもとで行うものでもない。自分自身で掴むものである。自分の目標は何か、入学時はどんな思いや考えだったのか、この先、自分は何をすべきか、といった自己省察の習慣を身に付けていくことが必要である。計画の副題として「〝3万人のLearning Journey〟の羅針盤となるCLMS（Campus Life Management System）」と表現したのは、学びの旅、キャンパスライフをこのアプリとともに歩み、必要な情報を自分自身で掴み、自己を見つめながら、学びを深めていく学生生活を実現してほしいと願ってのことであった。

2 「学生との距離を大切にし、学生たちを主役にする」思い

「東洋大学教育DX推進基本計画」は、学長、常務理事、学部長、関係事務部長らで構成する委員会組織の下、教職員を中心としたワーキングチームがさまざまにつくられ、部署間を越えた学内連携集団を形成しながら、進めている。

2021年5月には、複数のワーキングチームが編成され、その一つとして、学生と関わり合うワーキングチームがつくられた。当初は、学生から意見やアイデアを聞こう、アプリを使ってもらうための周知活動をしよう、といった趣旨に留まっていたが、活動を進めるに連れて、「学生たちが何に困っているのか本当に把握できているか」「私たち職員は、本当に学生のことを理解しているのだろうか」「分かっているつもりで業務をしているが、もしかしたら事務が管理しやすいようにしているだけじゃないか」という疑問を投げかけ合い始め、学生本位とは何か、大学事務の原点を考え直す会話が多くなっていった。

同年10月頃には、学生や教員を対象に200名を超える個別ヒアリングを行うことを決め、全学会議でも合意した。ひとり一人の声に耳を傾け、困っていることは何か、学びを充実していくために行っている工夫は何か、学びに対する姿勢や考え方の一つひとつを拾い集めていくことに時間が掛けられていった。学生たちには、アプリの要望も訊いたが、学生たちの熱意やコロナ禍の現状を目の当たりにし、ワーキングチームの意識は、今をどう見つめ、学生たちをどう支えるかに、段々と力点が置かれていった。

そして、同年12月頃、中心メンバーの職員から「アプリを提供するだけではなく、コロナの影響で失われた時間を学生たちに取り戻してあげたい」「大学って何をするところなのか、勉強するために来るのは間違いないが、それだけではないはず」「僕らが生み出す時間が学生のためにならなければ意味がない」「学生たちに活気がなければキャンパスではない」という意見が出された。あらゆる部署から集まった職員たちはコロナ対応も含む通常業務と並行しながら、「学生との距離を大切にし、学生たちを主役にする」企画の検討を始めることになった。

3　My Journeyチームの発足とセルフリーダーシップ

「あくまでも主体は学生だ」「学生たちが自分たちで企画、運営していく・・・しかもこのコロナ禍で学生たちを集めるのか」「職員は、どこまで学生の企画に加わるのか」「学生間でトラブルが起きることも想定できる。しかもこの繁忙期にだぞ」。さまざまな意見が飛び交ったが、他の職員も参画し、部署間を越えて互いに知恵を出し合い始

Friendship of coro

めた。

計画全体の責任者である矢口悦子学長に企画内容を相談したときのことである。学長は、ワーキングメンバーにこう述べた。「職員さん同士がこうして学生を真ん中にして繋がり合っている。これは理想的な姿」「Learning Journeyという表現を用いた計画でもあるのだから、学生自身の旅の始まり、『My Journey』という企画名はいかがでしょうか」。学長にも背中を押されたこの企画はスタートすることが決定した。

企画会議は、通常業務時間の合間、または終業後にオンラインも併用しながら進めた。前述のワーキングチームの中心メンバーからは、「やはり、学生主体であることや、学長の語る学生自身の成長の旅、My Journeyの発想、そして何より、建学の精神にある『独立自活』を体感することじゃないか」「企画する学生、参加する学生、活動をサポートする学生が居てもいい。とにかく学生たちに語りかけよう」といった議論がなされ、学生自身のセルフリーダーシップ（自分自身を率いていく能力）を引き出す、学生主体による学生同士が繋がり合う企画にしようと意見がまとまった。

決まってからは動くのが早く、結束力が高いのが東洋大学職員の良さである。企画学生の募集説明会、WebフォームやYouTubeを用いた企画エントリーの準備、サポート職員の配置や、オンラインチャット形式での相談スペースの作成といった、さまざまなことが各部署のノウハウを生かし、瞬く間に進められていった。

年が明けた2022年1月、ハイブリッド形式で行われたMy Journey企画説明会には、32名の学生が参加した。企画の趣旨と最低限のルールのみを学生たちには伝え、その後は学生たち同士で話し合う。解散時間が過ぎても学生たちは話し合い、職員たちは、ただひたすら見守っていた。こうしてついに、キャンパスを越え、第1部・第2部や学部、学年の境目のない、7つのMy Journeyチームが発足した。

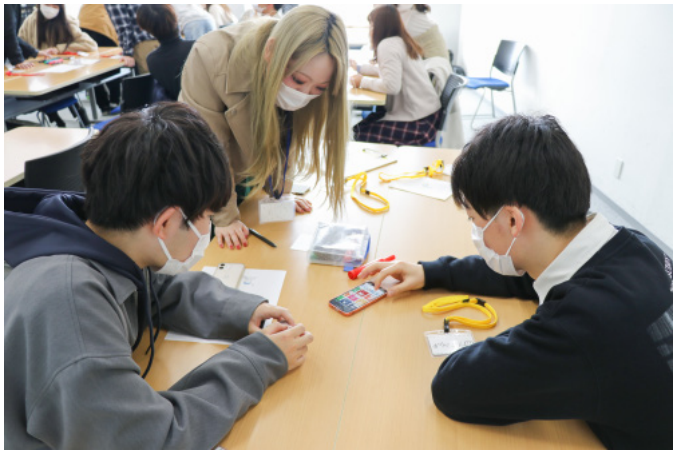
4 My Journey Week

「企画は何とか年度内に行いたい。実施は3月上旬だ」。学生たちは、わずか1カ月弱の期間で、企画検討と参加者募集、そしてイベント実施まで行う。

チームごとにさまざまなことが起きる。企画内容がまとまらないチーム、学生同士で深夜までオンラインで企画会議をするチームもあった。焦る学生たちからは、判断が難しい要望や意見が出たこともあった。

チームを支えた職員の一人はこう振り返る。「企画を成功させようと準備を進める学生は、私が想像していた何倍も熱を帯び、輝いていました。そんな学生による『My Journey企画』に気が付けば私自身も職員として成長させてもらい、記憶にも思い出にも残る日々となりました」。

そして、2022年3月上旬から中旬にかけて、7つのイベントが実施された。当日、職員はほとんど手助けを行わず、学生自身が主体となり、感染対策も自分たちで工夫して講じながら実施し、延べ170名の学生たちが参加した。一方で、オンラインと対面のハイブリッド形式で実施したチームは苦労も多く、また企画の難易度を上げて挑戦したチームは参加者が伸びないこともあった。それでも「たとえ一人しか参加しなかったとしても納得いくまでやろう」と心意気をもって臨む学生たちの姿は、まさにMy Journeyという自分自身の学びの旅を歩む者そのものだったと思える。



学部や学年を越え、学生たちが繋がったMy Journey企画の様子

5 新しい風が吹き始める

My Journeyチームの企画終了後、解散イベントを行ったが、すでに友人の繋がりをもっている彼らは、イベント終了後も交流を深めていった。そして、嬉しい声が届く。My Journeyチームの学生たちが「新入生を歓迎する企画を入学式で行いたい」というのだ。また、入学式業務を担っていた職員からは「せっかくなら、新入生たちを喜ばせようよ」という声が上がった。学長もこの声に賛同し、My Journeyチームの代表らが日本武道館に集まって、新入生歓迎企画が行われた。こうして、「学生に、充実したキャンパスライフを送ってもらい

corona generation

たい」という思いは、学生と教職員が一体となった行動によって形となった。

My Journeyチームの学生は、さらに新たな繋がりを生む。学部授業の一環として、アプリの利用状況に関する研究チームが学生主体で結成され、「学生たちのために作ってもらったアプリの活用をもっと促したい。また機能も改善したい」と、学長に相談に来る学生が登場した。学生たちと学長との対話がきっかけとなり、学生主体で公式Twitterの運営を始めることになった。キャンパスライフをもっと良くするアイデアを出し合う企画や活動が、学生たちの手で進み始めている。

入学式新入生歓迎イベントを実施した学生たち

話は大きく変わるが、先日、ある運動部の対外試合が都内で行われた。その応援席には、My Journeyチームの学生たちの姿があった。学生たちは笑顔で応援しながら、大学の校歌を心で歌う。

コロナ禍における学生生活を支える職員、特に学生対応部署は精神的な負担も多かったはずである。しかし、この活動は、誰かに指示されたものでもなく、職員が自分たちの心と体で学生たちの熱意を感じ取ったことが原動力であった。学生主体で業務を考えることは、この先の大学づくりで必ず生きる原点だと気づき始めた今、部署を越えた職員間の対話も増え、現場に新しい風が吹きつつある。

最後に、この活動に理解を示してくれた学生や教職員各位に深く感謝したい。

※ 東洋大学「学生PRワーキングチーム」
市橋篤、伊藤岳人（経営学部教務課）・齋藤隆一郎（学生支援課）・椿雅人（卒業生・甫水会連携推進課）・宮本靖子（赤羽台事務課）・小森花緒梨（法学部教務課）・高塚央紗武（学長事務課）・河部剛士（広報課）・雨宮聖矢（就職・キャリア支援課）・矢野智子（高等教育推進支援室）・石川瑛士、大迫槙、新山文洋（デジタル活用推進本部事務室）
＊部署名は2022年3月当時の所属で記載

Friendship of

新たな交流企画で学生の孤立を防ぐ
―DWCLA Pray & Hikeの取り組みを中心に―

村上 恵
同志社女子大学学生支援部長・生活科学部食物栄養科学科教授

はじめに

同志社女子大学は、京田辺市に京田辺キャンパス、京都市内に今出川キャンパスの2校地を有し、6学部11学科、1専攻科、5研究科を擁する女子総合大学である。現在、約6100名の学生が学び、毎年約1500名の新入生を迎えている。

本学では入学後1週間、新入生オリエンテーション期間を設けている。期間中、学生生活案内、創立者墓前礼拝、新入生交流会、クラブ紹介、学科ごとの交流プログラムなど多くの行事が開催され、新入生が友人を作り、大学生活に一日でも早く慣れるようにサポートをしている。また、これらの行事は、各学科の在学生からなる「新入生オリエンテーションリーダー」により支えられている。

新入生オリエンテーションリーダーは、毎年秋に在学生を対象に募集を行い、各学科10名~30名が活動をしている。12月に研修会を開催、学生支援部長による「同志社女子大学案内」、宗教部長による「礼拝の意味・礼拝の持ち方」のほか、カレッジソング、学生生活上の諸制度の確認に加え、外部講師によるリーダーシップトレーニング研修を実施し、自分なりのリーダー像、オリエンテーションリーダーとしての心構えを養う機会となっている。研修会を終えたオリエンテーションリーダーたちは、学科ごとに準備を重ね、オリエンテーション期間中、新入生の誘導や各行事の補助、履修の相談など親身になって新入生を支えてくれている。このように本学では毎年、新入生同士の「横のつながり」だけでなく、上級生との「縦のつながり」の構築にも尽力している。

しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、入学式を含むすべての行事が中止、学生証の交付

や履修方法など最低限の説明のみを行い、その後、学内への入構すら禁止せざるを得ない事態となった。楽しみにしていた大学生活を突然奪われた新入生に何ができるのか、模索が始まった。ここでは、2020年秋から新たな交流企画としてはじまった「DWCLA Pray & Hike」の取り組みを中心に紹介したい。

1 創立者墓前礼拝

新島襄・八重夫妻をはじめ、同志社創立に尽力された方々が眠る同志社墓地は、若王子神社から山道を登った若王子山の山頂にある。同志社の寮生たちが中心となり、創立記念日や新島永眠の日に、墓前で夜明け前に祈祷会を行うようになったのは、おそらく1897年前後からであろうと言われており、この寮生による自発的な祈祷会が第二次世界大戦後、学校の行事として引き継がれ、現在に至っている※。本学では新入生オリエンテーション期間中に新入生全員が参加し、創立者墓前礼拝を行ってきた[写真1]。同志社墓地で墓前礼拝を行うことで、新入生一人一人が創立者の志に思いを馳せる、本学の大切な伝統行事である。しかしながら、2020年度以降、コロナ禍により中止を余儀なくされている。

[写真1]創立者墓前礼拝の様子

2 オンラインを利用した交流会の実施

2020年春、新入生オリエンテーションの中止後、遠隔授業となり、キャンパスにおける交流の機会がなくなった新入生の不安を取り除くことを目的とし、オンラインを利用した上級生との交流会を実施した。5月25日～9月3日の期間、開催日数30日、一人暮らしや自宅生活での悩み、有意義な時間の使い方など71テーマでの交流を行った。上級生125名と新入生205名が参加しており、一定の効果は得られたように思う。しかしながら、

デジタルネイティブ世代と言われる学生たちであっても、自宅にこもる生活の中で、授業も交流も常にオンラインで行われることへの疲れや、オンラインが苦手な学生には参加しにくいなど、オンラインによる交流の限界や課題が浮き彫りになったようにも感じられた。同時に対面での交流の重要性を再認識し、秋に向けて、新しい交流企画を考えるきっかけとなった。

3　新たな交流企画 ―DWCLA Pray & Hike―

2020年秋になり、大学への入構はできるようになったものの、3密(密閉・密集・密接)となる状況を回避するため、一部の講義や実験実習を除き、遠隔授業は継続され、さらに秋に実施される大学祭やスポーツフェスティバルも中止、クラブ活動もできない状況が続いた。

スポーツフェスティバルは京田辺キャンパスが開設された年(1986年)から行われている全学的な行事の一つで、スポーツを通して、学部学科、学年を超えた交流を行い、毎年約600名が参加している。

このように新入生オリエンテーションだけでなく、大学祭やスポーツフェスティバルも中止となり、さまざまな交流の機会を奪われ、リアルな友達作りに苦労する新入生に対して、2020年秋に初めて「DWCLA Pray & Hike」を企画し、実施した。この企画は本学の伝統行事である創立者墓前礼拝を新たに持続可能な形で実施する、という方針のもと、人数制限を設けた上で、参加については自由参加とした。また、アウトドア活動をしながら学生同士の交流をはかることを意識したものである。「墓前礼拝で創立者の志に触れる」「楽しいアウトドア」という内容を学生同士の会話やSNSメッセージ内で、印象的かつ手軽に言える「伝わるタイトル」となるよう想いを込めて、DWCLA Pray(祈り)&Hike(ハイキング)と名付けた。

当日は午前と午後の2部制にし、上級生をリーダーとするグループに分かれて今出川キャンパスを出発。京都御苑、新島旧邸、鴨川河川敷、哲学の道を散策しながら若王子に向かい、山頂の同志社墓地では宗教部による墓前礼拝が行われた。その総移動距離は約8キロ。そのすべてを徒歩で行く強行軍であったが、その道のりの中でクイズに答えるという形で本学のルーツに触れながら、同級生や

Friendship of coro

［写真２］DWCLA Pray & Hike in 2022 Spring の様子　（上）新島旧邸　（下）鴨川河川敷

上級生と交流を深め、どの学生も山頂では礼拝の厳かな雰囲気の中で創立者の想いに包まれ、心地よい疲れと達成感が得られたようであった。参加者からは、『今年はずっと大学に来られず、行事もなくなって虚無感を感じていたので、今回のイベントに参加でき、素敵な思い出ができた』、『不安な毎日を過ごしていたが先輩方が優しくとても良い時間が過ごせた』などの感想が寄せられ、大変好評であった。新入生も上級生もこのPray & Hikeへの参加によって、コロナ禍で不安な気持ちと抑制された日々から少し解放されたようであった。

この行事はコロナ禍で規模を縮小しながら実施している新入生オリエンテーション期間中に引き継がれ、2021年度、2022年度は「DWCLA Pray & Hike in Spring」として実施をしている。参加者は2020年度の75名から2021年度146名、2022年度318名と年々増加している。当日のスケジュールも少しずつ見直しを行い、出発前にグループで自己紹介も兼ねた交流企画(クイズ)に参加し、市内を移動中[写真2]には、「面白いトリック写真を撮れ」や「外国を感じる写真を撮れ」などのお題に沿った写真をチームで撮ってもらう「写真ミッション」を行った。各グループで撮った写真は若王子神社到着時点で提出、後日、学生支援課で審査の上、グランプリチームには賞品を用意し、本学HPにも掲載した。さまざまな仕掛けを用意することで、最初は緊張していた新入生や上級生も同志社墓地に到着するころにはすっかり打ち解けている様子であった。実施後のアンケートにも、参加したほとんどの学生が「大変良かった」、「良かった」と評価し、『友達作りのきっかけになった』、『話したことがない同級生とも話せた』、『1年生と話す機会がないので良い機会となった』など、新入生同士が友人となるきっかけづくりや上級生との関わりを生むといった「縦と横のつながり」の構築に貢献していると手ごたえを感じている。2023年度の新入生オリエンテーションにおいても継続して実施する予定である。今後さらに、行程や企画の見直しなどを行い、新入生がより参加しやすい行事へと育てていきたいと考えている。

おわりに

本学では新入生オリエンテーションリーダー以外に、本

corona generation

学ならではの制度として、1957年より続く「ビッグシスター・リトルシスター制度」がある。これは、初めて体験することが多い大学生活の新しい環境に、少しでも早く慣れ親しめるよう、入学前の新入生（リトルシスター）に上級生（ビッグシスター）を紹介する制度である。心強い相談相手・良き友人として、先輩・後輩を超えた信頼関係を築けることが大きな魅力となっている。いずれも希望者が自ら応募するものであるが、リトルシスターは2020年度217名、2021年度486名、2022年度630名、ビッグシスターは2020年度195名、2021年度267名、2022年度340名と年々増加している。特にリトルシスターの希望者はこの3年間で3倍に増加したことから、コロナ禍以降、新入生の大学生活への不安の大きさを示し、上級生との「縦のつながり」がその解消に役立っている。

また、2022年10月末には従来の球技などに加えて、eスポーツも取り入れたスポーツフェスティバルを3年ぶりに開催し、約600名が学部学科、学年を超えて交流を深めた。

コロナ禍前から新入生の不安な事柄の上位には友達作りが挙げられてきた。コロナ禍でさまざまな交流機会を奪われ、制約を受ける日々の中で、その不安感はますます大きくなっている。現在、本学も少しずつコロナ禍前の日常を取り戻しつつあるが、そのような中にあっても、人間関係をうまく構築できない学生の孤立を防ぐため、「DWCLA Pray & Hike」のような新たな交流企画を含むさまざまな交流の機会を作っていく必要性を感じている。もちろんこれらはきっかけにすぎないが、その中から、学生たちが自分にあった方法を選び、やがて自分自身で次へのステップへ進んでいけるよう、これからも学生たちからの意見も聞きながら、支援を続けていきたいと考えている。

※ 学校法人 同志社 法人事務室発行『同志社墓地のご案内』
http://www.doshisha.ed.jp/pdf/doshisha_cemetery.pdf

Friendship of

入学前の友だちづくりサポート
―TOGAKU Meet & Greet（トーガクミーグリ）―

渡邊 紳也
東洋学園大学
入試広報センター入試室課長補佐・
ましましプロジェクトリーダー

1 入学前サポートプログラム企画の背景

「最初の友だちができたのは入学から半年後でした」

入学前サポートプログラムの立ち上げに先んじて在学生へのアンケートを行った際、ある学生がこう答えた。2020年度に入学したこの学生の世代は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け入学式が行えず、授業もオンラインでスタートという状況であった。

確かに授業についてはオンラインで実施できる体制が整えられたが、こと大学生活という意味では入学直後から緊急事態宣言が発令され、オンライン授業のためほぼ通学もできず、部活もサークルもアルバイトもできず悶々とした日々を過ごしていた学生も多かったと分かった。

一部の授業が対面で行われることになったのは秋学期（9月）で、その際にようやく友だちができたというのが冒頭の学生の言葉である。

大学進学というライフステージの変化にあたり、さまざまな不安を抱えている者も少なくない。在学生へのアンケートで入学前に不安に思っていたことは何か、という質問に対し「友だちづくり」と回答した学生が多く、特にオンライン授業が増えているコロナ禍においては同じクラスであっても対面で接する機会が少なく人間関係に不安を抱えているということであった。

コロナ禍以前でも入学直後から授業に欠席がちとなってしまう学生は存在しており、場合によってはそのまま退学してしまうケースもあった。もちろんこのようなケースは交友関係のみが原因ではないが、早期から同級生や先輩学生とコミュニケーションがとれて、大学へ通う動機が見つかれば、中には違う結果になった学生もいたかもしれない。輪をかけてこのコロナ禍である。通常時に比べ不安を

抱く学生が増えることは容易に想像できた。

こうした状況を踏まえ、数ある大学の中で本学を選んだ学生に充実した学生生活を送ってほしいという思いから入学前サポートプログラムの構想が始まった。

2 サポートプログラム実施事例

2021年6月に、2022年4月の入学生へ向けたサポートプログラムを検討するため「ましましプロジェクト」を立ち上げた。この名称は友だちを「増やし」、大学への興味が「増す」ようにという思いを、特定種のラーメンのトッピングを増やすことを俗に「マシマシ」と言うことになぞらえてつけられた。

プロジェクトでは、入学前に抱える人間関係への不安解消をサポートするためには大学から一方向なコンテンツ提供を行うのではなく、参加者が同級生や先輩学生と交流を図ることができ、シームレスに入学へとつなげられるイベントが必要だと考えた。

サポートプログラムで行う一連のイベントを「トーガクミーグリ(TOGAKU Meet & Greet)」と名付け、総合型選抜や学校推薦型選抜といったいわゆる年内入試での入学が決定し始めた12月下旬より翌年3月末まで継続的にオンラインと対面で実施することとした。

(1)オンラインイベント

オンラインイベントを実施するにあたり、本学が使用したシステムはoVice株式会社※iが提供するバーチャル空間である。Webブラウザ上で動作するもので、パソコン・タブレット・スマートフォンいずれの端末からでもアクセスが可能となっている。

空間は2D(平面)で表示され、フィールド上に表示される自身の分身となるアバターを操作し、会話をしたり動画やWebコンテンツ等を見たりすることができる[写真1]。

検討段階では3D空間のシステムも案にあがったが、参加者の多くがスマートフォンを使用することが予想されることから、端末への負荷や通信量が少ない2Dを利用することとした。没入感やエンターテイメント性で劣る一方でスマートフォンを所持していれば場所を選ばず参加できることや操作が容易であることが大きな利点である。実際、参加者へのアンケートでは8割以上がスマートフォンから

の参加であり、操作が難しいと答えた者は少なかった。

ログイン画面でニックネームを入力すれば自身の分身となる「アバター」が生成されバーチャル空間に登場する。操作は移動したい場所をダブルタップ（パソコンの場合はダブルクリック）するとアバターが移動するシンプルなもので、他の人が操作するアバターと一定距離に近づくと会話ができる仕組みになっている。

オンラインイベントは毎週水曜16時に開催される「トーガクアワー」とスポットで行うイベントを合わせて計14回実施した［表1］。

［写真1］オンラインイベントの様子

毎回異なるテーマを設定し、先輩学生や教職員によるトークライブ、ネイティブスピーカーの教員との英語交流、参加者同士が協力するクイズ大会、運営スタッフがカメラ片手にキャンパス内を回り部活やサークルの活動状況をライブ配信する等、バラエティに富んだイベントを実施した。そして毎回のメインコンテンツ終了後、質問受付やフリートークタイムを設け、参加者が交流できるような形とした。

バーチャル空間でのイベントは、参加者が画面に一覧表示されるのみの一般的なオンライン会議システムに比べ、アバターが縦横無尽に動き回り、そこかしこで会話やチャットで交流しており、参加者が同じ場所で過ごしている空気感が生まれたように思う。参加者からは「入学前に先輩学生や同級生と直接コミュニケーションが取れたりクラブ・サークル活動を見ることができたりしてうれしかった」という声が寄せられた。

イベントでの交流をきっかけに一緒に入学式に出席した参加者もおり、友だちづくりの一端を担えたのではないかと考える。

No.	実施日	イベントタイトル	ゲストスピーカー
1	2021年12月23日	オープニングイベント～教えて先輩編①～	先輩在学生　3 名
2	2022年1月12日	大学での友だちづくりについて	人間科学部　准教授
3	2022年1月19日	大学のオンライン授業＆パソコン事情①	メディアセンター職員
4	2022年1月22日	謎解きイベント作戦会議	―
5	2022年1月26日	なんでも質問タイム	先輩在学生　3 名
6	2022年2月2日	活動中に突撃訪問！クラブ・サークル紹介	学生支援課職員・学生団体
7	2022年2月9日	入学予定者講習について聞いてみよう	教養教育センター職員
8	2022年2月15日	英語交流イベント （バーチャルイングリッシュラウンジ）	英語教育開発センター教員 4 名
9	2022年2月26日	教えて先輩編②	先輩在学生　3 名
10	2022年3月2日	大学のオンライン授業＆パソコン事情②	メディアセンター職員
11	2022年3月9日	スペシャルイベント　チームで協力！ オンラインクイズ大会	―
12	2022年3月16日	大学の図書館を利用しよう	図書館職員
13	2022年3月23日	資格取得とキャリアについて	資格・キャリアステーション職員
14	2022年3月30日	これまでの振り返り＆なんでも質問タイム	―

[表1]オンラインイベント実施 一 覧

(2)対面イベント

対面のイベントはキャンパス全域を使った「謎解き」を実施することとした。「消えた不死鳥と幻の七不思議」というタイトルで、コンテンツ開発はプロの謎解きクリエイターの協力も得て本格的な仕上がりとなった。

5名程度を1グループとして、キャンパス各所に隠された謎を解き、盗まれてしまったフェニックス・モザイク※2の原画を取り戻すという架空のストーリーである。

各グループには先輩学生をファシリテーターとして配置し、キャンパス内で迷ってしまった際や謎解きに行き詰まってしまった際にそれとなくヒントを出すことにし、参加中のトラブル回避に努めることとした。運営側では演劇サークルをはじめダンス部や軽音楽部といった学生団体が出演し、ストーリー進行や謎解きに必要な役割を担ってもらうこととした。また、謎を解くために訪れる場所はパソコン自習室や学食、体育館等入学後に利用することになる施設を多く設定した。

このような形のイベントとしたのは、参加者総数が多い場合でも、少人数グループでオープンスペースの多いキャンパス全域を移動することで感染症対策がとれること、ま

た、謎を解く中で同級生や先輩学生との交流ができ、キャンパス施設への理解も深めることができるためである。

イベントは2022年2月に実施すべく準備を進めていたが、残念ながら直前に東京都の行動制限が発令され、実施を延期することとなってしまった。そのため、入学後の2022年9月に在学生全体向けのイベントとして改めて開催した［写真2］。入学後ではあったが、中には初対面の学生が同じグループになることもあり、イベント後にSNSのアカウント交換を行う等、交友関係が構築されていたようだった。参加者からは謎を解く上で自然と会話が生まれることや謎解きそのものが楽しかった等の意見が寄せられた。

［写真2］謎解きイベントの様子

3 今後の取り組み

2023年4月入学予定者に向けては、本稿にて紹介したオンライン・対面のイベントの実施に加え、コミュニケーションアプリ「LINE」を用いたサポートを活発化する予定である。

昨年度のイベントの中では授業のことやカリキュラム等教学面に関する質問に比べ、わざわざ電話やメールしてまで聞くほどではない細かな疑問や不安が多く寄せられた。例えば「通学する服はたくさん必要？」「クラブ・サークルは入ったほうがいい？」「パソコンは何を買えばよいか？」「友だちはいつ、どんなタイミングでできる？」等、一つ一つは小さなことだが、入学予定者にとっては大きな関心事のようだった。今後はイベント参加者をさらに増やしていくことも課題の一つにあるが、イベントに参加しない者であっても、このようなふとした不安や疑問をいつでも質問できるようにLINEを使用したワンストップサービスを展開し、多様なニーズに応えていきたいと考えている。

corona generation

おわりに

本プログラムはコロナ禍の支援として構想が始まったものだが、イベント参加者や在学生の声を聞くうちに、そもそも新しい生活を迎えるにあたって生じる不安はコロナ禍でなくとも存在し、そのサポートは現在の状況が変わっても継続するべきだと感じた。

本学が掲げる理念の一つに「面倒見のよい大学」というものがあるが、このプログラムを通して「〝入学前から〟面倒見のよい大学」と思ってもらえるよう、今後も本プログラムの充実を図っていきたい。

※1　oVice株式会社　https://ovice.in/ja/

※2　フェニックス・モザイク　本学1号館西壁にある陶片壁画。作品のデザインと制作指導を建築家の今井兼次氏が担当し、1961（昭和36）年に旧東洋女子短期大学開学10周年を祝し、学園のシンボルとして完成した。タイトルは「岩間がくれの菫花」。校舎建て替えの際に解体された他4作品と合わせてフェニックス・モザイクと総称される［写真3］。

［写真3］フェニックス・モザイク

Friendship of

共通教育での学修を通した友だちづくり

高野 嘉寿彦
信州大学学術研究院総合人間科学系教授・同学系長・全学教育機構長

はじめに

信州大学（学部入学定員1978人）は、松本キャンパスに人文学部、経法学部、理学部および医学部、長野教育キャンパスに教育学部、長野工学キャンパスに工学部、伊那キャンパスに農学部、上田キャンパスに繊維学部の8学部を有し、長野県内5つのキャンパスからなる地域分散型の総合大学である。全国（世界）から学生が集まり、約75％が長野県外出身である。教養部時代より学部に入学した1年生は1年間、松本キャンパスで共通教育（本学では教養教育を「共通教育」と呼んでいる）を受けた後、2年生から各学部（各地）に進級していく。サークル活動等を通してキャンパスをまたいだ学生間の交流はあるが、多くの学部生は他学部生との交流が少ないまま進級している。このため、以前より「信大生としてのアイデンティティの醸成」が課題になっている。

1 共通教育カリキュラム

2006年4月に全学協力体制のもと、共通教育を責任をもって実施する組織として「全学教育機構」が設置された。これまで2011年度、2015年度および2020年度からの共通教育カリキュラムを定期的に見直してきた。先に述べた「信大生としてのアイデンティティの醸成」のため、2015年度からのカリキュラムにおいて、一部学部を除いて教養科目の演習科目（以下、「教養ゼミ」と呼ぶ）を必修化した。さらに推し進めて、2020年度からの共通教育カリキュラムでは、「主体的・能動的学び」を柱として「基盤系」「教養系」「専門基礎系」の3つの系で構成した。「基盤系」は学問形成に不可欠な基礎・基本的な知識の習得・能力開発を目的とし、「学術リテラシー」「健康」「言語（1年次）」「統計」「科学史」「現

代社会論」の6科目、「教養系」は、社会人として必要な幅広い教養の習得、問題解決力・探求力の開発を目的に、「人文・社会(11科目)」「自然・技術(7科目)」「環境・健康(7科目)」の3区分25科目、「専門基礎系」は学部専門につなげるための知識や能力の習得を目的に「言語(2年次)」「基礎科学」を設けている。

2 学術リテラシーにおける交流

文部科学省が進めている「高大接続改革」における大学教育改革では「学力の3要素の伸長」が求められている。これを念頭におき2020年度からの共通教育カリキュラムでは初年次教育(高大接続教育)の位置付けで「学術リテラシー」を設けた。学術リテラシーは教室での対面授業(1単位、8回、1クラス50名弱)で前期に隔週で実施している(本学は前期および後期の2学期制)。毎回のグループ活動により多種多様な専門知識や考え方が異なる学生同士が協働して課題に取り組む。グループ活動を通して「楽しく」(事前および事後学習は多い授業)学習することで、「信大生としてのアイデンティティの醸成」につながり、学部や学科等の枠を越えた「学修」を通した交流ができる。

初年次教育の専門家以外の教員が担当できるようにハンドブックを作成、前半(1週から4週)では「読み中心」として第4回目は新聞を用いて自身が選択した記事について記事内容の時間的変化や自身の意見を2分間のプレゼン資料としてまとめてグループ内で発表する。また、後半(5週から8週)では「書き中心」で第8回目は指定課題図書の書評を2分間の発表原稿にまとめてグループ内で発表する。各回のグループ活動を通した成果物に対してコメントして、コメントを受けての修正版に対するグループ内での相互評価(成績評価の4割に加味される)や自己評価を行う形式で高等学校までの学習を振り返り(確認し)ながら進める「スタディスキル」に重点を置いた必修科目である。

共通教育の全ての科目において「授業アンケート」を実施しているが、学術リテラシーは授業アンケートに加えて独自のアンケートを本学のシステムを用いて実施している。質問項目は「入学前や学術リテラシー受講前の学び」(8項目)と「学術リテラシーの内容や受講後の変化」(12項目)である。2020年度の回答率は69・6%で「オンラインでのコミュニケーションに苦労した」という回

答が多く、成長したことは「文章を書くこと」に焦点をあてた回答が多くみられた。経験のない新型コロナウイルス感染症のため余儀なくオンライン授業になり、多くの学生が他者とのコミュニケーションの取り方に苦労したようだ。2021年度の回答率は81・1％で、対面での実施ということもあり、文章を書くことやコミュニケーションに関して成長したと回答した学生が多くみられた。今年度の回答率は51・9％と低くなったが、苦労や成長したことについては昨年度と大きな差はなかった。

学術リテラシーのアンケートの質問項目の一つに「学術リテラシーの受講前は、学習中の他者とのコミュニケーションについてどのように思っていましたか?」がある。「自分から積極的に関わりたい」から「できる限り関わりたくない」まで5段階で回答する。各年度（2020～2022年度）「自分から積極的に関わりたい」と「どちらかと言えば関わりたい」を加えた割合は約65％であった。学術リテラシーを通して多くの学生が学部や学科等に関係なく交流しているものと考えられる。これは初回授業やグループ替え後にグループメンバー同士がLINE交換していることからもうかがえる。逆に「どちらかと言えば関わりたくない」と「できる限り関わりたくない」を加えた割合は各年度約15％であり、他者との関わりに消極的な学生が一定数いる。

3 教養ゼミにおける交流

本学の教養系の科目には講義（標準受講生数100名）と教養ゼミ（25～30名）がある。学術リテラシーは50名弱でスタディスキルを中心に実施、さらに少人数でアカデミックスキルの割合が高い教養ゼミを2020年度より全1年生に課している。受講生は特定の学部や学科等に偏らないように原則抽選により決定している。

各学期の教養ゼミ担当教員および受講生を対象に実施状況調査（教員対象9項目、学生対象5項目）を実施している。2022年度前期の本題に関係する設問項目について述べる。教養ゼミは53科目開講、受講者数1363名、回答率65・0％であった。受講生対象の調査の設問は、「①グループワークの実施とその頻度」「②フィールドワークの実施とその頻度」「③レポートのフィードバックとその頻度」「④コミュニケーション力が身についたか」「⑤論理構成力が身についたか」の5項目である。①の回答では、5回未満および実施な

Friendship of coro

しの割合が約35%、15回全て実施が23%であり、多くの教養ゼミでグループワークを実施していることがうかがえる。設問④は「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階回答で、「強くそう思う」「そう思う」を合わせると72%になり、他者との協働の中でコミュニケーション力が身についたようだ。このことから教養ゼミを通して学生間の積極的な交流があったことがうかがえる。

4 入学前教育における交流

本学では専門性に応じた課題等を学部ごとに課している。また、全学教育機構では学校推薦型選抜合格者が多い工学部を対象に入学前教育を行っている。参加は任意である。この入学前教育は、個別ワーク(大学eラーニング協議会が提供している教材を使用)が5コースとグループワークの2つから構成されている。グループワーク(1グループ3~4名)では他の合格者と一緒に数学や統計等の3つの課題に挑戦する。これにより、他の合格者との交流や共通教育を担当する教員との交流ができる。

入学前教育アンケートの設問項目「入学前教育に参加してよかった」および「来年度の入学生に入学前教育への参加を勧めたい」(5段階回答)では、「そう思う」および「どちらかと言えば、そう思う」と回答した割合が80%を超えており、入学前教育の内容や活動に好印象だった学生が多く、他者と「楽しく」グループ活動できたものと思われる。

おわりに

全ての学部学生が交流できる共通教育では、学術リテラシーや教養ゼミでのグループ活動の他、講義においても他者との交流の機会を与えている授業が多くある。「友だちをつくる」に特化した取り組みではないが、共通教育で他者と積極的に関わってもらいたいと思う。今後もウィズコロナを念頭に「密」な授業を展開し、対人関係の構築を支援していきたい。

全学教育機構から望む松本キャンパスと北アルプス